

様式第2（第9条関係）

政 務 活 動 費 成 果 報 告 書

令和6年 11月11日

犬 山 市 議 会

議 長 柴 田 浩 行 様

議員名 鈴木 伸太郎

下記のとおり、研修会の成果を報告いたします。

(1) 年 月 日	令和6年 11月 4日(月)
(2) 場 所	①関西学院大学 ②タグボート大正・ヨリドコ大正
(3) 形 態	会派 () : その他 (鈴木のみ)
(4) 内 容	① 研修会 「コミュニティの自律経営」 著者 吉村慎一氏 ② 水辺エリア再生事業・・・タグボート大正 空き家リノベーション事例・・・ヨリドコ大正
(5) 成果・提言	報告書別紙



出張報告書 令和6年11月4日（月・休）

- ① 吉村氏は、福岡市職員から衆議院議員政策担当秘書に転身、再び福岡市職員に復職、定年退職後は社会福祉法人理事、現在は地元自治会の会長を務めておられるという経歴。

本年7月に「コミュニティの自律経営」という書籍を出版され、その内容を直接詳しく聴く機会があり参加した。主催は「CIPFA-JAPAN（一社）英国勅許公共財務会計協会日本支部」、参加者はほぼ関西学院大学石原研究室で公共財務を専門的に学んだメンバー。私も議会選出監査時代に、関西学院大学で学んだ経緯があり、今回ご案内頂いた。

前述の通り経歴は紆余曲折、当時の市議長に請われ、市職員を退職し政策秘書に転身、落選、九州大学の研究生、再び市職員に復職し、議会事務局次長で退職されるという、本人曰く「ジェットコースター人生」。しかし、話の本筋は、そのような経歴ではなく、職員時代に行った数々の改善アクション。

まず、福岡市 DNA 改革について学んだ。

DNA とは D・・・できる、から始める、できない・しない理由から始めない。N・・・納得できる仕事をする。A・・・遊び心を忘れない。の頭文字をとった造語。幹部も含めた職員間のグループウェア上に掲示板を設け、仮名可の自由に意見交換できる場を作った。月々6万アクセス程度の実績を上げ、それが横串を入れていく起爆剤となっていた。

この運動は全国に広がり、発表大会が全国で持ち回りで開催され、近隣では名古屋市、豊橋市、春日井市が会場にもなった。犬山市と友好姉妹都市の丹波篠山市でも開催している。

今回もいろいろなキーワードが出てきて、

- ・行政に対して市民は弱い存在
- ・行政マンは市民にとって、知識・情報・経験・権限を持つ頼られる存在
- ・「規制する行政」から「住民本位の行政」への転換

等々、普遍的でありながらなかなか難しいことを示唆していただいた。

タイトルである「コミュニティの自律経営」とは、吉村氏が市職員を経て現在の地区会長をされる経過の中で、行政に頼らず住民主体のアクションが大切であると感じたことを言い表している。

ごみ、高齢化、子供会、通学路、交通安全、防災・・・自治会に与えられる責任は多岐にわたり、それぞれが地域住民にとって重い。

従来は、それらは行政がやるものだと決めていた節があるが、本来の姿は、地域住民ができるところまで頑張って、足りないところを行政が支援する、という考え方で、言葉では理解しているものの、なかなか実践は難しいことを実際にやられてい

るとのことで大変参考になった。

そのほか、「もやい九州」とおいう、九州各地の職員の学習や情報交換の場創出など、長年お経験を語って頂いたが、根底には「職員の育成、やる気創出、そして職員への愛情」があることに気づかされた。

犬山市への提言

以前「業務改善」を目指して若手職員が部署を越えて集まっていた。最近も職員提案で新たな取り組みが行われていたりするが、もっと効率的組織的に取り組める事があるはず。福岡市が実施したように、庁内のオンライン掲示板で改善事項をどんどん提案できるような制度風土を創るよう、提案していく。

① タグボート大正

大阪環状線大正駅近く、尻無川堤防に創られた親水ゾーンを見学した。大正駅と大阪ドームを結ぶ中間点に存在し、飲食店が10軒ほど入っている。道路とは完全に分離されており、イメージとしては大阪湾に繋がる波止場のイメージ。昼間に訪問したが、夜の方が賑わいを見せるような雰囲気、店舗メニューもアルコール系が充実している。実際、施設の装飾には船具が使われていたり、昭和レトロ的な備品を利用、大阪下町の「場末感」を醸し出すなど意匠に凝っている。親水施設としては、ちょうど一年前、新潟市の信濃川河口付近を見学したが、新潟の開放的な明るい雰囲気とは真逆であった。

犬山市への提言

犬山市でも木曽川沿いの水辺をどのようにしていくかが検討されているが、ナイトタイムと水辺というのは親和性を感じる。特に犬山は客単価の高い夜の飲食が弱いので、今後このような手法を真似すると動きが出てくることを期待する。ただ、今回のタグボート大正も新潟も、生活臭はない。木曽川河畔は生活道路でもあり、値域住民との対話は必須である。

ヨリドコ大正

大正駅から歩いて15分ほど、住宅と工場が混在する尻無川河口部にある、かつての長屋をリノベーションした賃貸施設を見学した。

高度経済成長期に建設されたワンルームの二階建てアパート（長屋）に、雑貨店、飲食店、介護事務所、などが入居している。全10部屋ほど物件はあるが、半数は空き家、テナント集めに苦労している感は否めない。アイデアはとても良いが、立地、家賃、地域の魅力など、さまざまな要因が折り重なっていくので、事業を興すには慎重さが求められると感じた。

今後、都心部ではこのような空き家の利活用について、さまざまなケースが出てくると思われる。郊外である犬山のような都市でどのような動きがあるのかも注視していく。

犬山市への提言

空き家対策は、戸建て中心に進められているが、集合住宅にも目を向けるべき。多様性を重視する風潮からすれば、均質化した郊外の住宅団地より、市街地のアパートの方が、柔軟な利活用が可能で地域活性化にもつながる。そのような物件を壊さず生かすよう、地域でも提案していく。

以上